

凍み雪の日

奥村 美枝

あの頃母は追い詰められていた。宮城県の仙台市高砂にできた市営住宅に当選し、入居。父の家族との同居生活から独立したからか、父は全く給与をいれず。飲む打つ買うで使い果たし、日々の生活費にも事欠く始末。もちろん母は黙っていたわけではない。四歳の私と一歳の乳飲み子の弟の前で、彼に「お願いだから給料を持って帰って来て」と頼んでいた。父の返事は、卓袱台返し。昭和である。「おめらに出す金はねし」と母へのDVが始まる。まさに昭和な光景。半世紀以上前のことである。

さらに母を追い詰めたのが、病弱だった弟の存在だった。彼は生死をさまよう大病を患い、入院することにもなった。その時、父の口から出た言葉は「そんな弱子供、オラあの子でねエ。」「どっか置いてご。」「病院代、払えねがらな」。近所わたりに響く大声でわめく父。そして母への暴力。止めに入る私も殴る。凍てつく冬の日。グレーの磨りガラスの向こうに凍みる吹雪。家の中には火鉢と対流式の縦長石油ストーブ。それだけが温かみを部屋に与え、その両方にかけてあるヤカンの声だけがやさしさを醸していた。

父に何があったのか。何が彼にそんなふるまいをさせていたのかは、昔も今もわからない。ただ、その時幼心に「この人を頼らない」と誓った。

ある雪の日。弟がまた高熱を出した。母は彼を診療所へ連れて行くことにした。大人の足で20分の道のり。母は「家でお留守番してて」と言う。しかし母の言葉にただならぬ気配を感じた私は、「私もいく」と即座に返した。「そう…」母は弟を背中におぶい、分厚い綿入れのねんねこを彼の頭から被るように身に着け、ウールのショールも巻いた。私は赤いウールのオーバーコートに母とお揃いのニット帽を被った。二枚重ねで靴下を履いての、ゴム長靴。母は五本指の手袋。私は赤い毛糸で繋がったミトン。お昼近くだったが、診療所への道には人影はほとんどなかった。三人の道行きのおともは、しんしんと降りつもる雪と歩く度に起こるさっくさっくの音。その頃の仙台の冬は、今よりずっと雪深かった。診療所の待合には石炭のダルマストーブがあり、ヤカンの湯気の声をたてていた。弟は診察を受け、注射された。彼のかぼそい泣き声が診察室から漏れてきた。薬を処方され、診療所をあとにした。

雪はさらに深まっていた。人通りは全く無い。高砂の竹藪沿いの道には車両も通らない。家へ帰るはずなのに、道が違う。「どこへいくの」。母は答えない。「お家へ帰ろうよ」。雪音ばかりが答える。母は、返す言葉も術も失っていた。心許なくなった家計から診療代を払ってしまった母

は、思考が停止した。弟の果ての見えない病いの状況も、彼女の正常な思考の余裕を失わせていた。「道、ちがうよ」。母は無言でずんずん進む。「まって」。私は雪に足を取られながら追いかけた。深みにはまり、長靴に雪が入ってきた。足に雪の冷たさが染みる。雪の中を歩くうちに、足の指先から冷たさがじんじん刺してくる。

仙山線の踏み切りの前に、私たち三人はいた。吹雪いてきた。踏み切りのカンカンカンというベル音とともに遮断機が下りてきた。「どこいくの」。無言の母。私の左手を握る。「宮町のおばあちゃんとかいくの」。わずかの間があつて「死んじやおか」ぽそりと言つ。「もうじき汽車が来る」母が私の手をぎゅうと握り締めた。(ええ?) とつさに私は閃いた言葉を放った。自分の心臓の音と遮断機音が重なった。「生きていれば、きっといいことがあるって、昨日テレビの中の人が言ってたよ」と、昨日白黒テレビで俳優が言っていたセリフを、がむしやりに言つた。母は遠くに視線を置いたまま、私の手をきつくきつく握り締めた。私も精一杯の力で握り返した。一瞬の永遠の時。凍りついたひととき。山形行きの汽車が、汽笛とともに眼前を通り過ぎて行つた。ベル音が止み、吹雪の音と離れていく汽笛だけが響く真つ白なその場所で、「そうだね。その言葉に生きていこうか」母はひそやかに言つた。長靴の中の足の指達は雪に埋もれて、じんじん言つた。ミトンの中の指達も感覚を無くしていた。顔にあたる吹雪が凍みた。オーバーを通して体まで凍みてきた。私たち三人は、さらに雪深くなつた道に戻り、家へ還つた。

あの日から50年以上がたつた。父は昨秋に大往生。母は関西に。弟は関東。私は南国鹿児島に。離ればなれに暮している。

あの凍み雪の日は、私の杖となつた。あの日が、幾度となく私を救い、護つた。過酷極まりない体験が、人に生きていく勇氣と希望を与えるということもあるのだ。